日本の酪農を考える

コスト高が酪農経営を直撃
～減少続く牛乳生産～

飼料価格の高止まりが全国の酪農家を直撃し、厳しい経営環境が続いている。さらに燃料代の上昇や後継者難、環太平洋連携協定（TPP）交渉など、将来への不安から廃業する酪農家も少なくない。そうした影響から、国内の牛乳と乳製品の生産は減り、将来、安定供給ができなくなる懸念もでてきた。国民の食卓に、安全で安心な牛乳と乳製品を届けるため、各地の酪農家は、さまざまな工夫を凝らし、経営改善に努めている。酪農を取り巻く現状について専門家に聞くとともに、酪農家の現状をリポートする。

企画制作／北海道新聞社広告局

▲中央酪農会議の迫田潔専務理事

安心・安全な牛乳届ける
戸数・生産減に歯止め必要

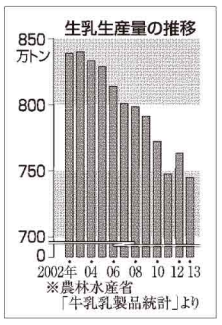
「牛乳は100％が国産。戦後、学校給食などで子どもたちに牛乳はよく飲まれ、体格の向上と健康保持に寄与してきた。今後も、安心・安全な牛乳を届けたい」―そう話すのは酪農家の全国組織、中央酪農会議の迫田潔専務理事だ。

酪農経営をめぐる情勢は厳しい。全国の酪農家はピーク時（1963年）には42万戸あったが、現在は1万8600戸と激減。高齢化の進展や後継者難、TPPなどが将来への不安を高め、離農が止まらない。

1戸当たりの飼育頭数は、この20年間で40頭から75頭へ規模は拡大した。それでも2013年度の生乳生産量は745万㌧とピーク時（98年度）より1割以上も減った。そのため「酪農経営の基盤が揺らいでいる」と迫田専務は懸念する。

乳牛の餌の主な原料である米国産トウモロコシ価格が高騰している。

「かつて餌代は生産費の4割程度だったが、輸入飼料の高騰によって5割にまで跳ね上がり、経営を苦しめている」（迫田専務）。



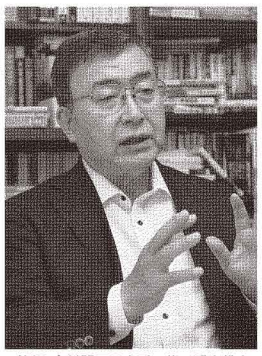
その対策として酪農家は、牧草の栽培拡大や、稲作農家と連携して稲が未熟な段階で刈り取って発酵させる「稲発酵粗飼料」の生産増など経費削減に取り組んできた。

さらに、乳牛のふんを堆肥小屋で発酵させ、肥料として田畑へ還元しているほか、希望する家庭菜園に分けている農家もある。耕作されず放置されている耕作放棄地では、牧草を栽培するなど農地の有効利用にも役立っている。

迫田専務は「多くの人に牛乳の価値をご理解いただき、これからも牛乳を飲んでもらえば、それが酪農家の力になり、酪農家減や生産量減少の歯止めになる」と話している。

インタビュー

安い穀物の時代は終わった
～資源・食料問題研究所代表～



▲資源・食料問題研究所の柴田明夫代表

世界の穀物需給について資源・食糧問題研究所の柴田明夫代表に聞いた。

―乳牛の餌となる穀物価格の動向は。

「配合飼料の中心となるトウモロコシ価格は、米国での増産によって今年4月以降下がっている。だが長い目で見れば原油価格が1㌬＝100㌦と高騰しているため1次産品である穀物価格も大きく上昇。安い穀物の時代は終焉（しゅうえん）したといえる」

―日本の酪農を取り巻く状況をどう見るか。

「中国やアジアの需要増から世界的に牛乳・乳製品需要は急増している。だが日本は酪農家の戸数が減少し牛乳の生産も減っている。つまり世界とはベクトルが逆。高齢化など将来への不安から廃業の道を選ぶ酪農家もいる。酪農家は経営努力をしているが、費用の半分を占める飼料代の値上がりで経営は厳しい」

―日本の酪農が衰えるのが心配だ。

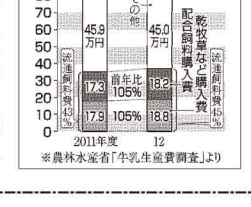
「日本の酪農が衰退したら、輸入への依存度を高めればいいという考えは大きな間違い。バターやチーズなどの国際的な乳製品需給は逼迫（ひっぱく）傾向。価格は上昇基調にあり、それが今後も続くと見込まれる。現に中国やインドネシアは乳製品の輸入を増やしており、日本は優先して乳製品を買うことができなくなり食料危機につながる恐れすらある」

―酪農の課題は何か。

「政府は『6次産業化などによる畜産、酪農の成長産業化』を掲げている。確かに地域を活性化させる一つの手法だが、全ての酪農家で取り組めるわけではない。安定的に牛乳や乳製品を供給するためには、コストを反映した適正な価格を維持し、危機に陥っている国内の酪農生産基盤を早急に強化する必要がある」

―TPPが合意した場合に懸念されることは。

「安い外国産乳製品が入って北海道の乳製品工場が倒産し、ドミノ式に本州へ影響することだ。将来を不安に思いさらに廃業が増えるだろう。いったんそうなったら、酪農を立て直すのは非常に困難だ」



〈生産者レポート〉

牛に鎖なく、餌食べ放題
「ストレスかけずに乳量増」「自家栽培で経費削減」

9月上旬、兵庫県の南西部に位置する赤穂市で牛乳を生産している丸尾牧場を訪ねた。

牧場の朝は早い。まだ辺りが薄暗い午前5時すぎ、牧場主の丸尾建城（まるお・たてき）さん（61）は牛舎の牛の状態を見て回る。5時半ごろ、搾乳室には牛が自然に集まり始め、左右に8頭分ずつある搾乳スペースに入った。順番を待つ乳牛は、「わたしの順番はまだ？」と言っているかのように首を振った。丸尾家では、建城さんの父が1956年に牛1頭から酪農を始めた。建城さんが2代目として跡を継ぎ、飼育数を24頭に増やした。

現在は、奥さん、次男で後継者の建治（けんじ）さん（31）の3人で、搾乳牛115頭、子牛22頭、出産前の牛15頭と大規模に酪農を営んでいる。社員2人とアルバイトが作業を支えていた。

搾乳のため牛がいなくなった牛舎では、建治さんがふんを小型車で素早く処理。牛舎内に新しいおがくずを敷き、大型車両で飼料を配っていた。丸尾牧場の特徴は、牛にストレスをかけないよう、さまざまな工夫を施している点にある。

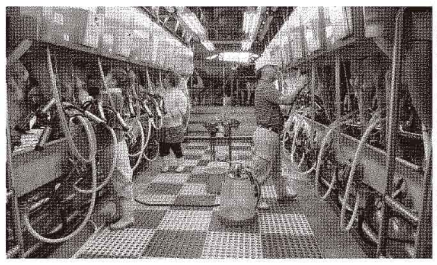
まず、牛を鎖でつながない「フリーストール牛舎」の採用がある。牛は牛舎内を自由に動き、好きな時に好きなだけ食べることができる。「その方が、ストレスが無く牛の事故が少ない」と建治さん。「猛暑もストレスになって食欲が無くなる。だから扇風機やシャワーなどで温度管理している」。こうした努力が実を結び、乳質は近畿でベスト3に入り、1頭当たりの乳量も増やしてきた。

◀牛のストレスを減らすため、鎖でつながない「フリーストール牛舎」を採用

全国の酪農家は、牛の餌の配合飼料の値上がりに苦しんでいる。建材価格や酪農で使う機械や燃料、電気代も値上がりし経営を圧迫している。

「年々生産コストが上がり酪農経営は大変」と建城さん。コスト削減のため丸尾牧場では牛の好きな牧草「イタリアンライグラス」を25㌶自家栽培し、青刈りして白いビニールで包んで乳酸発酵させ、配合飼料と水を混ぜて与えている。稲を発酵させる「稲発酵粗飼料」も7㌶栽培。こうして生産コストに占める飼料代は40％台に下げることができたという。

午前7時半、牛乳を集める専用車が来て、2日分の牛乳6㌧を運んで行った。「搾りたての牛乳だよ」と建城さんから特別にいただいた牛乳は、コクがあってほんのり甘かった。



◀搾乳作業をする丸尾さんと従業員